

# インターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジの効果

—言語関連クラスにおける実践報告—

森 朋子

インターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジは、通信システムを利用し、他国および他文化にいる学生同士が交流し学び合うことである。東京家政学院大学で筆者が担当する言語関連クラスと California State University, Monterey Bay の言語学クラスの履修生それぞれ 12 名が基本 1 対 1 の ZOOM ミーティングを 3 回行った結果、東京家政学院大学学生の自己評価において①言語についての「発見」、②コミュニケーションについての「発見」、③英語コミュニケーション力向上の実感、④興味の広がり、⑤達成感という効果が認められた。

キーワード：インターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジ 効果 言語関連クラス

## 1. はじめに

インターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジ (International Virtual Exchange) とは、通信システムを利用し、他国および他文化にいる学生同士が直接交流し学び合うことである。Collaborative Online International Learning (COIL), Global Networked Learning, Telecollaboration と呼ばれ、実施する機関が昨今世界各地域に広がっている (IVEC ホームページ)。

IVEC (International Virtual Exchange Conference) は、これらの活動を体系的に支援しているが、世界の大学に向けて提供している “IVECProject” の説明の中で、参加する学生の目標を以下の通り掲げている。

- ・To improve your intercultural Competence. (異文化理解を深める。)
- ・To experience authentic communication with students from other cultures. (他文化の学生と直接交流するという経験を得る。)
- ・To find out about your own and others' cultures and lifestyles. (自国および他国の文化

や生活習慣について発見をする)

- ・To improve your communication skills. In this project, this means learning to communicate in another language with people who do not know much about your culture. (自国の文化に詳しくない相手に対し、他言語でコミュニケーションすることを通して、コミュニケーションスキルを高める。)
- ・To improve your digital literacy skills. (デジタル・リテラシーのスキルを向上する。)

(IVE ホームページ、日本語訳筆者)

上記の目標が、実際の活動において達成できたという報告もなされている。例えば、英語学習者の場合、「英語母語話者との実践的なコミュニケーションの場となること」「言語能力を向上し異文化理解を助けること」等の利点が指摘され、活動を通して学生が「異文化に対する感性が敏感になったこと」「他文化を尊重するようになったこと」「交流についての自信がついた」「第2言語を学ぶことへの動機づけの高まり」等の効果が報告されている (Hagley & Thompson 2017, Hagley 2020)。

かつては現地を訪れることでしか実現しなかった他国および他文化の学生との直接の交流が、通信システムの発達によって、長い距離を移動することなく可能となった。移動することの時間的、体力的、経済的負担が大幅に軽減されることにより参加者層が広がり、複数国から大勢の同時交流が可能になるなど直接訪問とは異なる特長を有している。インターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジは、直接訪問の代替ではなく、ひとつの新しい教育方法であり、世界中の学生が同時に学び合えることに大きな意義がある。しかしながら、まだ新しい分野であり、今後実践から得た知見を蓄積し、より有効な活用方法を模索していくことが必要となろう。

そこで本稿では、筆者が担当する言語関連クラスで初めて実施したインターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジについて紹介し、授業に取り入れることの効果を検証していきたい。

## 2. 参加校・参加学生・使用言語

今回報告するインターナショナル・ヴァーチャル・エクスチェンジは、東京家政学院大学で筆者が担当する「言語学概論」「言語コミュニケーション」「Practical English B」履修生+日本語教育研究生と California State University, Monterey Bay (以下「CSUMB」と言う。)の“LING392”履修生の間で実施された。双方とも参加学生は12名ずつである。両学とも、1学期のコースの一部の活動としての実施であった。

使用言語は英語であるが、東京家政学院大学学生の参加者のほとんどは英会話の経験がなく、口頭コミュニケーション力に限りがある状況であった。

## 3. 方法・手順

実施の方法・手順は以下の通りである。

### 3-1 基本方針の確認

まず、両学の授業担当教員が Finkbeiner & Lazar (2015) の下記の部分を交流の目標とすることを確認した。CSUMB の担当教員からの提案であったが、東京家政学院大学担当者の求めるところと合致したので問題なく合意に至った。

The aim was to explore cultural similarities and differences in the life stories of individuals from different cultural backgrounds through intercultural exchange and discourse. (目的は、交流と談話を通して、異なる文化背景を持つそれぞれの経験からお互いの文化の共通点および相違点を発見することである：日本語訳筆者)。その上で、具体的なテーマは授業の到達目標に合うようにそれぞれの大学で決定することが確認された。

### 3-2 交流の時期・回数・使用アプリの決定

両学の授業担当者間で、2020年10月7日から11月9日の間に、学生1対1のZOOMミーティングを3回実施することを決定した。

回数を1回ではなく3回としたのは教育効果を高めるためである。交流期間は、学年暦および学期の期間が異なる両学の事情に合わせて設定した。

### 3-3 マッチング

両学の学生は、ほぼ同時期にそれぞれの担当者に自己紹介(英語)と交流可能な曜日・時間帯を提出した。CSUMB 学生の情報一覧のファイルは、現地担当者から東京家政学院大学担当者にメール添付で送られ、東京家政学院大学担当者がパートナーのマッチングを担当した。マッチングの基準は、ミーティング可能な曜日・時間帯が合うかどうかである。表1にマッチングの詳細を示す。

表1 マッチング表

東京家政学院大学					CSUMB	
学生	学年	授業名	出身地	母語	学生	
1	1	言語学概論	日本	日本語	1	
2			台湾	中国語		
3			日本	日本語	2	
4			日本	日本語		
5	2	言語コミュニケーション	日本	日本語	4	
6			韓国	韓国語	5	
7			中国	中国語	6	
8			中国	中国語	7	
9			日本	日本語	8	
10			PE B	日本	日本語	9, 10
11				日本	日本語	
12	研究生		中国	中国語	12	

※10・11の「PE B」は Practical English B のこと。

表1の通り、東京家政学院大学の学生は、出身地と母語にやや多様性がある。CSUMBの学生は全員が3年生で国籍はアメリカ合衆国である。母語は英語だが、大半がメキシコ系アメリカ人であり、スペイン語を第2言語としている者が多い。履修科目のLING392は、小学校教員養成課程の推奨科目で、全員教員志望である。

1対1ではなく、1対2の組み合わせになっているケースは、ミーティング可能な曜日・時間帯、参加学生の英語力を理由とした調整による。

### 3-4 ミーティング資料の作成

東京家政学院大学の学生(以下、「学生」という。)は、ミーティングのテーマにしたがって、授業内でアイデアを交換し、資料の作成を行った。

教員は、学生が初めての「英語母語話者と言語について行う英語でのミーティング」が円滑に行えるよう、①テーマの説明、②資料作成の指導、③クラス内のディスカッションの指導、④ミーティングで使われる英語表現の教示、⑤ミーティングのシミュレーションを通してサポートした。

### 3-5 パートナーへの連絡

毎ミーティング前には、学生からパートナーへ連絡メールを送った。教員の指導により、内容には次の事柄を必ず含んでいる。

- ①自己紹介(初回のみ) / はじめの挨拶(2回目以降)
- ②ZOOM ミーティングの日時の確認
- ③ミーティング前に添付の資料を読んでもらうよう依頼
- ④ミーティング前にパートナーのトピックを送ってもらうよう依頼
- ⑤終わりの挨拶

②③④⑤については、初回前に教員が英語の例文を示している。①の自己紹介は、自分に興味を持ってもらえるかを考えることをアドバイスをしたが、意味が通じる限り英語の修正はしていない。

### 3-6 ミーティング

パートナーと打ち合わせた日時に各自ZOOM

でミーティングを行った。

### 3-7 ミニレポート

ミーティング終了後、1週間以内にミニレポートを作成し提出した。レポートの内容は、以下の通りである。

- ①ミーティングの結果
- ②英語と自分の母語との違い
- ③②で見られた違いからどのような文化の差を感じたか。
- ④パートナーのトピック
- ⑤ミーティングの評価
  - ・聞き取り
  - ・発話
  - ・コミュニケーション・ストラテジー
  - ・雰囲気
- ⑥異文化コミュニケーションについて気づいた点

3回目のミニレポートには、1回目～3回目のミーティングを通しての評価も加えた。

### 3-8 発表

3回のミーティングが全員終わったところで、1回目、2回目、3回目のミーティングの報告会を授業3回分を使用して実施した。

発表会では、まず学生が、各自ミーティングの結果をパワーポイントを使って発表し、質疑応答およびクラス全体でのディスカッションを行っている。

東京家政学院大学の学生の母語は、日本語、中国語、韓国語の3カ国語であったため、そこに英語を加えた4カ国語の共通点と相違点がディスカッションでは話し合われた。

## 4. ミーティングのテーマ

3-1で述べた通り、それぞれの授業の到達目標に合わせてミーティングのテーマを決めることにしたため、両学学生のパートナーへの質問事項は同じではない。

東京家政学院大学では、「言語学概論」「言語コミュニケーション」「Practical English B」全てで効果的な学びとなるよう、(1)～(3)のテーマ

は教員が決定した。3回のミーティングの内容は以下の通りである。

#### 4-1 第1回ミーティング「音声」

【自分の母語にない音をどのように聞き、どのように発音するかを検証する】

音声のどの要素を取り上げるかは各学生が選択した。例えば日本語母語話者は、「英語のLとRと日本語のラ行の音の違い」「英語のf [f] と日本語のふ [ɸu]の違い」、韓国語母語話者は「英語の[u]と日本語・韓国語の[ɯ]の違い」、中国語母語話者は「英語の有声音 VS 無声音と中国語の有気音 VS 無気音の違い」等を選んでいる。

「英語のLとRと日本語のラ行の音の違い」を選んだ学生は、ミーティングで、資料を使いながら、①自分は英語のLとR ([l][r])の聞き取りができるかパートナーに単語を読んでもらう。②自分は英語のLとRを言い分けられるかパートナーに評価してもらう。③パートナーが日本語のラ行[r]をどのように発音するか評価するという活動を行っている。

以下の資料は、学生（日本語母語話者）がミーティングの結果を記したものである。

#### <第1回ミーティング資料-LとR、ラ行の例>

##### 1 L and R

A Please read either a) or b). Let's check if I hear the sound.

- |              |          |   |
|--------------|----------|---|
| 1) a) lay    | b) ray   | ○ |
| 2) a) lead   | b) read  | ○ |
| 3) a) blew   | b) brew  | ○ |
| 4) a) flute  | b) fruit | ○ |
| 5) a) glade  | b) grade | × |
| 6) a) splay  | b) spray | × |
| 7) a) clock  | b) crock | × |
| 8) a) file   | b) fire  | ○ |
| 9) a) deal   | b) dear  | ○ |
| 10) a) spool | b) spoor | ○ |

B I read the same words. Please check the one (a or b) you hear.

- |             |          |   |
|-------------|----------|---|
| 1) a) lay   | b) ray   | ○ |
| 2) a) lead  | b) read  | ○ |
| 3) a) blew  | b) brew  | × |
| 4) a) flute | b) fruit | ○ |
| 5) a) glade | b) grade | ○ |

- |              |          |   |
|--------------|----------|---|
| 6) a) splay  | b) spray | ○ |
| 7) a) clock  | b) crock | × |
| 8) a) file   | b) fire  | ○ |
| 9) a) deal   | b) dear  | ○ |
| 10) a) spool | b) spoor | ○ |

#### 2 [r] in Japanese

- |                            |   |
|----------------------------|---|
| 1) rakuda (camel)          | 2 |
| 2) sakura (cherry blossom) | 3 |
| 3) ringo (apple)           | 3 |
| 4) kirin (giraffe)         | 2 |
| 5) rubi (ruby)             | 1 |
| 6) saru (monkey)           | 2 |
| 7) rekishi (history)       | 3 |
| 8) kirei (beautiful)       | 2 |
| 9) roba (donkey)           | 3 |
| 10) kiuro (yellow)         | 2 |

※2の数字は「3 = 母語話者と同様」「2 = 母語話者の発音とは異なるが意味は通じる」「1 = 意味が通じない」という評価を表す。

#### 4-2 第2回ミーティング「語」

【誰に対してどのような呼び名を使うのか検証する】

「その人が前を歩いていて呼び止めたい時に何と声をかけるか」というテーマで、学生はまず自分の例を表に記入をした。ミーティングでは、パートナーの答えを聞き取っている。以下の資料は、学生（中国語母語話者）がミーティングの結果を記したものである。

#### <第2回ミーティング資料>

表2 パートナーの回答

Father	DAD
Mother	MOM
Older brother	
Older sister	Veronica
Younger brother	
Younger sister	
Grandfather	Grandpa
Grandmother	Grandma
Uncle	Tio
Aunt	Tia
Close friend	sharice
Classmate who you don't talk much	name
Her name: Jane Smith	
Teacher/professor	Dr. Gage

表3 自分の場合

	His/Her name	How I call him/her directly
Father	Yu Wancheng	Baba ("Dad")
Mother	Wang Yanqing	Mama ("Mom")
Older brother		...
Older sister		...
Younger brother		...
Younger sister		...
Grandfather on father's side	yudeshui	Yeye ("Grandpa" for father's side)
Grandfather on mother's side		Laoye ("Grandpa" for mother's side)
Grandmother on father's side	zhangyanfang	Nainai ("Grandma" on father's side)
Grandmother on mother's side		Laolao ("Grandma" on mother's side)
Uncle on father's side (father's older brother)	yuwanbin	Daye ("Uncle" for father's older brother)
Uncle on father's side (father's younger brother)		...
Aunt on father's side (father's older sister)	yu	Gugu ("Aunt" for father's sister)
Aunt on father's side (father's younger sister)		...
Uncle on mother's side (mother's older brother)		...
Uncle on mother's side (mother's younger brother)		...
Aunt on mother's side (mother's older sister)		Yi ("Aunt" for mother's sister)
Aunt on mother's side (mother's younger sister)		Yi ("Aunt" for mother's sister)
Close friend	Jiao Yang	Jiao Yang
Classmate who I don't talk much	Li Lei	Li Lei
Teacher/professor	Kan Rui	Laoshi

## 4-3 第3回ミーティング「表現」

【場面によって自分が属する社会や文化では一般的にどのような表現が使われるのか検証する】

母語の表現については、各クラスで同じ母語の学生がアイデアを出し合ったものである。ミーティング資料では、母語の表現は予め記入されており、学生はパートナーの回答を書き込んでいった。以下の資料は、学生（日本語母語話者）がミーティングの結果を記したものである。

## &lt;第3回ミーティング資料&gt;

## 1 出かける人や旅行に行く人を見送る時。

English

Safe travels

Have a nice trip

Massege me when you arrive

Japanese

いってらっしゃい。(Go and come back)

じゃあね。(See you)

気をつけてね。(Be careful)

## 2 お父さんをほめられた時（「良いお父さんね」）

English

Thank you

That's polite

Japanese

ありがとうございます。(Thank you)

そんなことないよ。(That's not true)

## 3 明日映画に誘われたけど、行きたくない時

English

I don't want to go, sorry.

Japanese

ごめんね。(I'm sorry)

明日用事があるから。(I have something to do tomorrow)

## 4 友達に誕生日プレゼントをあげる時

English

Happy birth day I hope you like it.

Japanese

おめでとう。(Congratulations)

あげる。(I give it to you)

気に入ってもらえると嬉しいな。(I'll be glad if you like it)

## 5 大きな旅行のお土産をもらった時

English

Thank you.

I really appreciate you.

Japanese

ありがとう。(Thank you)

大きいね。(It's so big)

もらえない。(I can't receive this)

荷物になったでしょう。(It must be bother for you to carry it)

## 6 クラスメートに試験の出来をきかれた時（実際は良く出来た）

English

There is room for improvement.

Japanese

まあまあだった。(So so)

全然できなかった。(I couldn't do it well at all)

うっかりミスをしてないか不安。(I'm worried if

I made a careless mistake.)

7 友達を家に呼んで、ご飯を食べ始める時

English

You are welcome to serve yourself.

Japanese

いただきます。(We receive)

遠慮しないで食べてね。(Don't hesitate and eat)

たくさん食べてね。(Eat a lot)

8 授業やアルバイトが終わった後、友達と別れる時

English

Have good day

Japanese

お疲れ様でした。(It's been tiring.)

またね。(See you)

やっと終わったね。(It finished finally)

9 先生の研究室に入る時。

English

Excuse me may I come in

Japanese

失礼します。(Please excuse me)

おじゃまします。(I bother you)

10 先生の研究室を去る時

English

Thank you see you soon

Japanese

失礼しました。(Please excuse me)

おじゃましました。(I bothered you)

ありがとうございました。(Thank you)

尚、CSUMB 学生のテーマは、主に「パートナー本人について」「言語学習歴」「言語生活」に関するものであった。以下に例を示す。

<パートナー本人について>

- ・好きなキャラクターやヒーローは誰か。
- ・これまで出会った最高の先生は誰か。
- ・何をするのが好きか。
- ・日本の大学について。
- ・時間がある時に何をしているか。

<言語学習歴>

- ・英語を習い始めたのは何歳か。
- ・英語を話すことを難しいと思うか。
- ・言語学習の中で得た良い経験と悪い経験は何

か。

<言語生活>

- ・座右の銘は何か。
- ・言語喪失についてどう思うか。

## 5. 効果

以上の活動を通して確認できた効果を検証していく。

### 5-1 言語についての「発見」

学生は、パートナーとのミーティングを通して、英語と母語の共通点および相違点を自ら「発見」している。学生のミニレポートから一部の例を示す。

<第1回ミーティング「音声」>

- ・お互いの母語にない音は意外と聞き分けられなかった (中国語母語話者)。
- ・日本語の「ふ」をパートナーはとても難しいと言っていた。(日本語母語話者)
- ・英語の [l]の方が[r]よりも日本語の [r] に似ている (日本語母語話者)。
- ・英語の音声は舌の使い方が難しい (日本語母語話者)。
- ・英語はwを発音する時に唇を丸めて、強い音になる (韓国語母語話者)。

<第2回ミーティング「語」>

- ・自分は妹を名前で呼ぶが、パートナーは "Sis" と呼んでいる (中国語母語話者)。
- ・祖父／祖母／伯父／伯母の呼び方はスペイン語？ (日本語母語話者)
- ・パートナーはあまり親しくない友人もファーストネームで呼ぶが、自分は「姓+さん」で呼ぶところに大きな違いがある (日本語母語話者)。
- ・パートナーは上下関係や親しい、親しくないに関わらず、ファーストネームで呼ぶ人が多い (日本語母語話者)。
- ・母語では、おじ・おばの呼び方が父方、母方、自分の親より年上か年下かで別の呼称を使い複雑だが、英語では "uncle" "aunt" のふたつである (中国語母語話者、韓国語母語話者)。

<第3回ミーティング「表現」>

- ・「父親をほめられた時」「テストの出来をクラス

メートにきかれた時」に、母語では謙遜する表現を多く使うが、英語では素直に述べるところが違う（日本語母語話者、中国語母語話者）。

- ・日本語は活動に対して「お疲れ様です」というが、アメリカでは“Have a nice day”などの表現を使う。次のことを考えている感じがして、前向きな声かけだと感じた（日本語母語話者）。
- ・英語では上下関係を意識しない表現が多い（日本語母語話者）。
- ・英語は韓国語よりもっとストレートで表現が簡潔である（韓国語母語話者）。

発表会の質疑応答およびディスカッションでは、母語ならびに自分がパートナーから得た結果と比べることで、非常に活発なやりとりが見られた。4つの言語の共通点および相違点についての「発見」も得られている。

以上、自分の体験を通じた「発見」で自ら獲得した知識は、学生の言語に対する理解を深め、興味を高めることに大変効果的である。

5-2 コミュニケーションについての「発見」

第1回～第3回ミーティングにおけるコミュニケーションについての自己評価の結果を表4～表7に示した。いずれも1～5の5件法による評価で、1は「全くうまくいかなかった」5が「大変うまくいった」である。表中の数字は学生の回答の平均値を表す。また、これらの結果については、ディスカッションのトピックの一部としている。

表4 聞き取り（パートナーの話を理解できたか）

		1回目	2回目	3回目
1	挨拶や世間話の時	2.9	3.5	3.5
2	自分の課題の時	3.8	3.8	4.1
3	パートナーの課題の時	2.9	3.3	3.4

(n=12)

表5 発話（パートナーが自分の話を理解できたか）

		1回目	2回目	3回目
1	挨拶や世間話の時	3.3	3.6	4.0
2	自分の課題の時	3.4	3.8	3.7
3	パートナーの課題の時	2.9	3.3	3.6

(n=12)

表4および表5の結果について、ディスカッション時に「なぜ自分の課題の時の方がパートナーの課題の時よりも数値が高いと思うか」を問いかけたところ、学生から、自分の課題については「内容を知っている」「練習している」という発言があった。

表6 コミュニケーション・ストラテジー

		1回目	2回目	3回目
1	言い換え、資料の提示、ジェスチャー、表情などを工夫した（自分）	3.4	3.7	3.9
2	言い換え、資料の提示、ジェスチャー、表情などを工夫した（パートナー）	3.6	4.2	4.3

(n=12)

表7 雰囲気

		1回目	2回目	3回目
1	明るい表情やトーンで雰囲気が良くなった（自分）	4.1	3.5	3.9
2	明るい表情やトーンで雰囲気が良くなった（パートナー）	4.0	3.9	4.0

(n=12)

表6および表7の内容については、「異文化コミュニケーションについて気づいた点」の回答にも多くの指摘があった。

- ・言語が異なっても、積極的に伝えようとすることで通じ合える（日本語母語話者）。
- ・とことところ話しかけてみることで少し話しやすくなる（日本語母語話者）。
- ・聞き取れなくても反応したり、表情で伝えることで相手に伝わる（日本語母語話者）。

- ・笑顔で友好的な雰囲気を作る（中国語母語話者）。
- ・言語が通じなくても、表情を読み取ると会話の流れや雰囲気をつかむことが出来た。同じ言葉を発していても表情の違いで全く違う意味合いになってしまうこともあるので、表情と声のトーンはコミュニケーションをとるうえでとても重要な手段だと気づいた（日本語母語話者）。

以上、学生には異文化間コミュニケーションにおいて、事前の準備をすること、コミュニケーション・ストラテジーを使い、良い雰囲気を作ることで伝えやすくなるという気づきが生まれている。コミュニケーションは、言語だけでなく様々な要素を総合して行うものだというを「体感」できることは、今後様々な場面で役立つ効果である。

### 5-3 英語コミュニケーション力向上の実感

前掲の表4を見ると、「聞き取り」に関しては、「挨拶や世間話の時」「パートナーの課題の時」の1回目から2回目のポイントが前者0.6、後者0.4と上昇している。事前に準備が可能な「自分の課題の時」に関しては、1回目と2回目に変化はなく、2回目と3回目に0.3ポイント上昇している。

また表5の「発話」の場合、「挨拶や世間話の時」「パートナーの課題の時」で第1回、第2回目と徐々に上昇し、いずれも第1回と第3回では0.7ポイントの差がある。「自分の課題の時」は、2回目に0.4ポイントの上昇が見られるが、2回目と3回目に大きな違いはない。

「聞き取り」も「発話」も事前に準備できた話題よりも、そうではない要素の方が向上の実感が強く見られた。全体としては、3回という短い回数であっても回を重ねる中で自分の英語コミュニケーション力が向上したと実感できた学生が多かったことが分かる。

### 5-4 興味の広がり

ミニレポートからは、ミーティングを通して興味が広がったことが分かる記述が少なからず見られた。内容は、以下の例の通り「言語に関する興味」「英語習得への興味」に分けられる。

#### <言語に関する興味一例>

- ・アメリカで英語以外にもっとも話されている言語を調べたところスペイン語だということが分かった。
- ・パートナーから言語喪失についての質問があり、あまり考えたことがなかったので深く考えさせられた。
- ・パートナーに質問された座右の銘や日本語の名言について考えたこともなかったので、今後調べてみたい。

#### <英語習得への興味>

- ・語学力が高ければもっとコミュニケーションができるようになるので身につけたい。
- いずれも、ミーティングがきっかけで内発的な興味が広がっていったことが窺え、「学び」が「学び」を呼ぶ効果が認められる。

### 5-5 達成感

第3回ミーティングのミニレポートの最後に、ミーティング全体に対する評価について尋ねた(表8)。いずれも1~5の5件法による評価で、1が「全然そう思わない」5が「強くそう思う」である。表中の数値は、学生の回答の平均値である。

表8 ミーティング全体に対する評価

	項目	平均値
1	英語と母語の違いについて学びがあった。	4.1
2	アメリカと自国文化の違いについて学びがあった。	4.0
3	ミーティングを楽しんだ。	4.4
4	自分にとって貴重な体験だった。	4.8

(n=12)

表8を見ると評価の平均値はいずれも4.0を超えている。4の「自分にとって貴重な体験だった」は、満点に近く、達成感が高い活動であったことが確認できる。

## 6. おわりに

実施前は、インターナショナル・ヴァーチャル・

エクステンジの効果をも十分理解しながらも、学生が英語でのミーティングを通して十分な学びが得られるのかに懸念があった。しかし、実施してみたところ、「交流と談話を通して、異なる文化背景を持つそれぞれの経験からお互いの文化の共通点および相違点を発見する」という目的を達する結果が得られた。人と人との直接の交流がもたらす学びの大きさを改めて感じると同時に、日常にとどまったままで授業の学びをより深く豊かにしてくれるインターナショナル・ヴァーチャル・エクステンジの利点を再認識している。

今回の結果が得られたポイントとしては、次の2点がキーポイントであったと言える。

- ①事前に交流校担当者との打ち合わせを十分に  
行い、交流のテーマをそれぞれの大学で決めたこと。
- ②学生の活動の重点をミーティングとそこから  
得た結果の考察に絞り、準備（テーマの決定、  
資料作成、英語表現の教示、ミーティングの  
進め方のシミュレーションなど）に教員が積  
極的に関わった。
- ②については、準備をもっと学生に任せるべき  
ではないかという自問はあったが、初回というこ

ともあり、インターナショナル・ヴァーチャル・エクステンジが成功体験となって次の異文化間コミュニケーションにつながることを優先した。

今後は、今回の結果から実施方法などの検討を深め、さらに効果的なプログラムを組んでいきたい。また交流校の学生の反応についても分析していきたいと考えている。

## 引用文献

- 1) Finkbeiner, C. and Lazar, A.M. (2015) Getting to Know Ourselves and Others Through the ABCs. Charlotte NC: Information Age Publishing, INC.
- 2) Hagley, E., & Thompson, H. (2017) .Virtual Exchange: Providing International Communication Opportunities for Learners of English as a Foreign Language, Journal of Language and Culture of Hokkaido, vol.15, 1-10
- 3) Hagley, E. (2020) .Effects of Virtual Exchange in the EFL classroom on Students' Cultural and Intercultural Sensitivity, Computer-Assisted Language Learning Electronic Journal, 21 (3) ,74-87
- 4) IVEC <https://iveproject.org> (2021年2月2日閲覧)  
(受付 2021.3.25 受理 2021.6.24)